



公募テーマ：

「産業構造審議会 教育イノベーション小委員会
「中間とりまとめ」の論点の社会実装」に関するテーマ

グローバルな社会課題を探究する
全国の高校生向けサードプレイスの創出
実証事業
最終成果報告書

事業者名
NPO法人クロスフィールズ

2024年2月22日

担当者情報

- 所属・役職：プロジェクトマネージャー
- 氏名(フリガナ)：花井一太郎 (ハナイイチタロウ)
- メールアドレス：ichitaro.hanai@crossfields.jp
- 電話番号：080-4214-0473

実証事業サマリ：グローバルな社会課題を探究する全国の高校生向けサードプレイスの創出実証事業 (NPO法人クロスフィールズ)

実証の背景と成果

背景	<p>経済状況や居住地等に起因する体験格差が高校生の中で、「個性」「才能」「創造性」開花へのハードルとなっている。加えて、コロナ禍を機にグローバルな社会課題へ関心をもつ学生が減少している。そこで、グローバルな社会課題を探究し進路の選択肢を広げるプログラムを、格差を感じている幅広い対象層に提供することを目指す</p>
成果	<p style="text-align: center;">✔</p> <p>①多様な層に向けたプログラム認知拡大と探究学習プログラムの実装</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育機関や教育団体と連携することで、自組織のみではリーチできない、体験格差を感じている層へ認知拡大が可能であることが分かった プログラム後の余白時間の設計やプログラム修了生も巻き込んだ伴走により、オンラインでも多様な学習ニーズや生徒の個別性に対応する探究プログラムの提供が可能 <p>②次年度以降の自走プランの設計</p> <ul style="list-style-type: none"> 「地域間の教育機会格差の解消」をターゲットとし、企業スポンサーや篤志家からの寄付等を活用することで継続的な運営を目指す

実証内容

10月	11月	12月	1月	2月
	<p style="text-align: center;">参加者募集</p>	<p style="text-align: center;">プログラム実施</p>		<p style="text-align: center;">実証結果検証</p>
<p style="text-align: center;">プログラム詳細設計</p>				

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

1. 事業者

NPO法人クロスフィールズ

Vision:

社会課題が解決され続ける世界

Mission:

- 社会課題を自分事化する人を増やす
- 課題の現場に資源をおくり、ともに解決策をつくる



創業：2011年5月 メンバー数：28名 所在地：東京都品川区西五反田

主な事業内容

1) 留職プログラム：

社会課題に取り組む国内外のNGO/スタートアップに数か月にわたって派遣し、本業のスキルと経験を活かして社会課題の解決に挑む次世代リーダー育成プログラム

2) 社会課題体感フィールドスタディ：

国内外の社会課題や現地リーダーの活動と志から刺激を受け、社会に対する鋭い感性とぶれない軸を育む短期集中型の役職者向けプログラム

3) 社会課題解決ワークショップ：

社会課題に精通する国内外のリーダーと事業アイデア創出に取り組むプログラム

4) 共感VRワークショップ：

国内外の社会課題の現場をVR映像を通じて疑似体験し、当事者への共感や課題解決への想いを育むプログラム

これまでの「未来の教室」での取組

- 令和3年度STEAMライブラリー事業
- 令和4年度学びと社会の連携促進事業

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

2. 背景と目指す姿

背景

令和4年度「未来の教室」におけるクロスフィールズ実証結果より、本プログラム提供を通じた体験格差の更なる解消のために、以下A)～C)の解決すべき課題点が浮かび上がった。

- A) 本プログラムの認知層（アクセス/リーチ）の拡大
体験格差の解消に向けては、より多様な学生が本プログラムを認知し、応募する機会を増やす必要がある
- B) 参加者数の増加
昨年度実証した提供価値は維持しつつ、受け入れ生徒数を増やし、できる限り多くの子どもたちにこうした機会を届ける必要がある
- C) 多様な層の受け入れを叶えるコンテンツ修正
体験格差の解消に向けては、多様な層が参加できかつ学びを継続できる内容に修正する必要がある（昨年度は対象によってはハードルが高い内容になっていた可能性あり）

目指す姿

＜本事業が目指す姿＞

グローバルな社会課題に目を向け、自分事化し、その解決を志す進路を選択肢に入れながら、それぞれの「個性」「才能」「創造性」を居住地や経済状況に左右されずに、開花できる若者を増やす。これを通じて体験格差解消を目指す

＜そのために今年度実証した項目＞

- A) 本プログラムの認知層（アクセス/リーチ）の拡大
左記の対象層に認知を広げるため、地域連携を強化する。今年度は昨年度の参加者数実績が0であった地域の一つの大阪を実証エリアとし、大阪大学SSI(ソリューションイニシアティブ)と連携し地域の対象層への認知拡大を目指す。また探究格差の解消を目指すNPOと連携する事で、彼らが支援する経済困窮層の学生へのリーチも目指す
- B) 参加者数の増加
今年度は100名規模（本参加50、聴講生枠50）の実施とし機会提供者数を増やす（昨年度は30名を目処に実施）
- C) 多様な層の受け入れを叶えるコンテンツ修正
全セッション参加者・一部セッション聴講生と関与レベルを分けることによる参加障壁を下げる。

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

3. 実施体制・実証フィールド

実施体制

事業受託者：NPO法人クロスフィールズ
統括責任者：小沼大地（代表理事）
執行責任者：西川理菜（ディレクター）
実施担当者：プロジェクトマネージャー2名
遂行監督者：経営管理マネージャー1名
管理担当：事務局スタッフ1名

再委託先：

- ・パートナーNPO
 - ①NPO法人SALASUSU
 - ②NPO法人テラ・ルネッサンス
- ・講演ゲスト
 - ①株式会社笑下村塾 たかまつなな氏
 - ②株式会社Sunda Technology Global 坪井彩氏
 - ③株式会社キズキ 安田祐輔氏
- ・本プログラムの拡散協力パートナー
 - ①認定NPO法人DxP
 - ②公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン
 - ③大阪大学SSI
- ・ウェブ制作会社（告知に向けたウェブ・ビラ製作を担当）
サイ株式会社

実証フィールド

全編オンライン(Zoom)で実施

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

4. 実証内容概要

	狙い	取組内容
① 認知層の拡大	大阪を実証エリアの一つとし、大阪を拠点とする協業団体を通じて当該エリアにおける認知層（アクセス/リーチ）拡大を目指す	1) 協業団体が支援する大阪エリアの高校生への告知活動を通じた認知拡大および対象生徒のプログラムへの取り込み <ul style="list-style-type: none"> 協業団体が直接支援する高校生への個別告知 協業団体との関わりがある定時制・通信制高校等への告知 2) 大阪大学SSIと連携した拡散 <ul style="list-style-type: none"> SSI経由での大阪府教育庁等を通じた各高校への拡散 SSI主催教育イベントへのクロスフィールズ登壇によるプログラム告知
② 参加者数の増加	昨年度は30名を上限として教育プログラム提供を行ったが、参加障壁の低減による応募人数拡大を通じて、今年度は本セッション参加者50名を含む100名規模の参加者への機会提供を目指す	1) 公開参加枠の設定 <ul style="list-style-type: none"> 関心のあるセッションのみ参加可能とする一部セッションの公開/告知実施 2) 幅広い応募者を募る告知内容の工夫 <ul style="list-style-type: none"> プログラムへの関心がそこまで高くない層にも訴求する告知
③ 多様層の受入れを叶えるコンテンツ修正	プログラムコンテンツのバリエーション増や参加者コミュニティ作りの工夫により、多様な探究学習ニーズに対する機会提供を行う	学習環境およびコミュニティ作りの工夫 <ul style="list-style-type: none"> 参加者目線での学習環境の設計や参加者同士の繋がり作りを目的としたプログラム卒業生の巻き込み 各セッション後やプログラム期間中の参加者同士の対話を促す場の設定およびLINEを活用した少人数コミュニティの実装 各セッションでの余白時間確保による、多様な学習ニーズへの対応、各参加者の学びのペースの尊重

4. 実証内容詳細①認知層の拡大

検証項目：

大阪を実証エリアとし、大阪を拠点とする協業団体/教育機関を通じて当該エリアにおける認知層（アクセス/リーチ）拡大および繋がりのある生徒(生活困窮層を含む)のプログラムへの取り込みができるか？

実施内容：

- 1) 大阪で活動する教育団体が支援する、大阪エリアの高校生への告知活動
 - 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンが支援する高校生300名に対する同団体からのプログラム告知
 - 認定NPO法人DxPが生活支援する高校生70名および関わりを持つ通信制高校5校（OIC、YMCA2校、ECC、今宮工科高校（定時制））に対する同団体からのプログラム告知

- 2) 大阪大学SSIと連携した大阪エリアへの拡散
 - SSI経由での大阪府教育庁等を通じた大阪エリアの高校への拡散
 - SSI主催教育イベント「SSI学生の集い」へのクロスフィールズ登壇によるプログラム告知（23/10/4実施）
参考：10/4登壇イベントURL<<https://www.ssi.osaka-u.ac.jp/activity/salon/inochieducationap2/?sortcat=cat03>>

4. 実証内容詳細②参加者数の増加

検証項目：

プログラムへの参加障壁を下げることで、より多くの参加者を得ることができるか？

実施内容：

1) 公開参加枠の設定

- 参加障壁を下げるため以下の一部プログラムを公開セッションとして開放し、関心のある/出席可能なコンテンツのみ聴講可能とする枠を設定
 - Inspiration session#1 (ゲスト講演部分)
 - Inspiration session#2 (全編)
 - Career session#1 (ゲスト講演部分)
 - Career session#2 (全編)

2) 幅広い応募者を募る告知内容の工夫

- プログラムへの関心がそこまで高くない層にも訴求する、応募にあたっての心理的障壁を下げる告知内容の提示
※次葉の赤枠部分の募集メッセージを昨年度から追加、また広告掲載を実施

4. 実証内容詳細②参加者数の増加

【参考：募集ページ抜粋】

こんなことを考えている
高校生におすすめ！

- ニュースで聞く世界の問題をもう少し深く考えたい
- これからの進路について、国内外で活躍する先輩の話を聞いてみたい
- 海外の社会課題に関心がある、話せる仲間が欲しい
- 何か新しい経験にチャレンジしてみたい
- 全国各地から集まる“同世代”の仲間と共に学んでみたい
- オンラインを通じて社会課題の現場を体感し、学んでみたい

【参考：募集告知抜粋】

CROSS FIELDS
2023年12月22日

【参加者募集！全国の高校生向けクロスブリッジ2023公開セッション】2023年12月より開講している高校生向けCROSS BRIDGE（クロスブリッジ）は、海外の社会課題とつながりキャリアを探究するプログラムです。1/13（土）13:00~と1/28（日）13:00~のセッションは公開で実施し、それぞれ参加者を募集しています！1/13はウガンダで水問題の解決に取り組むSUNDA代表・坪井さんの講演、1/28は参加者による最終発表を予定しています。参加者とともに、海外の社会課題について触れてみたい・考えてみたいという方は、ぜひ以下のURLよりお申し込みください！（参加費無料/対象・高校1-3年生/オンライン実施）
https://share.hsforms.com/1m9DAtJSnT6WofyJea8_lcQczmoh
クロスブリッジの詳細は特設webサイトをご覧ください。
特設webサイト: <https://crossfields.jp/crossbridge/> さらに表示

CROSS FIELDS LEARN NEW

仲間とともに
世界とつながり
将来への
橋をかける2ヶ月！
いま始まる！

11月19日23:59応募締切 | 12月~1月にオンラインで開催 | 参加費無料！

全国の高校1~3年生募集中!!

CROSS BRIDGE グローバルキャリア開発キャンパス [クロス・ブリッジ] 2023

4. 実証内容詳細③多様層の受入れを叶えるコンテンツ修正

検証項目：

- 多様な探究学習ニーズに対して全編オンラインで良質な学びの機会提供ができるか？
- オンラインでもプログラム後も継続する仲間としてのコミュニティは形成されるか？

実施内容：

学習環境およびコミュニティ作りの工夫

- 昨年度プログラム修了生8名のプログラムへの巻き込み（企画相談/プログラムファシリテーター/参加者の相談相手/クロスフィールズ運営と参加者との橋渡し役）を通じた、参加者目線での学習環境作り
- 各セッション後(計6回)およびプログラム期間中(計3回)の参加者同士が自由に対話可能な場の設計による、参加者間の繋がり醸成
- 5名一組の参加者LINEグループを活用した少人数コミュニティ作り
- 各セッション後の余白時間※の設計による、多様な学習ニーズに対する機会提供および各参加者の学びのペースの尊重

※余白時間：参加者の興味関心についてゲスト講師に質問する、参加者間でセッションの学びを深め合う等、プログラム実施時間外の学生のための自由時間

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

5. 実証結果概要

結果

① 認知層の拡大

協力団体経由でこれまでリーチできなかった層へ認知を広げることができた

- 協力団体経由で団体が支援する経済困窮層を含む多様な層への告知を実施できた。一方で本告知経由での応募には至らなかった

大阪エリアにおいて昨年度から応募者人数が増加した

- 昨年度大阪府からの応募者0人に対して今年度は6名の応募者を得た
- 地域に根付いたNPOや教育団体と告知活動において連携することで、自組織のみではリーチできない層へ認知拡大が可能

多様な地域からの応募者を得た

- 応募者の居住地域は25都道府県+海外2か国となり、多様な地域から応募を募ることができた（応募者全体でも対昨年度+14名の70名の応募があった）

② 参加者数の増加

本セッション参加者50名(プログラム開始時点)、公開セッション参加者9名の計59名の参加者を得た

- 目標としていた本セッション参加者50名を達成することができた。一方で公開セッションの参加聴講生は目標達成には至らなかった。聴講生枠を今後も設ける場合は各セッションを独立したイベントのような形で打ち出し、その中で具体的な参加メリットの提示やセッション実施方法など更なる工夫が考えられる

③ 多様層の受入れを叶えるコンテンツ修正

全編オンラインながら参加者満足度の高いコンテンツを提供することができた

- プログラム修了生の巻き込みや余白時間の設計等によって、大人数の参加者に対しても満足度の高いプログラム提供ができた

LINEグループを活用したグループコミュニケーションは一部グループでは機能した

- コミュニケーションが活発なグループとそうでないグループと双方のケースが発生したものの、その後リアルで会う約束をしたり、インスタグラムの交換が終了後になされるなど、LINEグループ組成の価値も垣間見えた

5. 実証結果詳細①認知層の拡大

取り組み内容に対する実証結果：

- 協業団体が支援する大阪エリアの高校生への告知活動
 - 団体が支援する約370名の高校生への個別告知および5つの通信制高校へ告知し、認知拡大できた
 - 一方で、協力団体からの告知経由での応募者流入には繋がらなかった

<応募者流入に至らなかった想定要因（協業団体へのヒアリングに基づく）>

- 今回ターゲットとした経済的困窮層の若者は、「目の前の生活で目いっぱい」という方も多く、プログラム参加と目の前の生活を天秤にかけた際に、「応募しない」を選択する学生が大半だったと推察
 - 学習意欲が高い/学習環境が整っている人しか応募できないといったプログラムへの印象があり、経済困窮層に訴求をするには参加メリット（ex. 交通費無料でxxに訪問できる、図書カード1,000円分プレゼント、PC/wi-fi貸与等）の設計が必要か
- 大阪大学SSIと連携した大阪エリアへの拡散
 - 大阪エリアにおいて昨年度大阪府からの応募者0人に対して今年度は6名の応募があった
 - オンラインを主体とした拡散活動
 - 応募者の居住地は25都道府県+海外2か国となり、多様な地域から応募を募ることができた。
 - また**応募者の約7割が(授業外での)探究学習未経験者**であり、より探究の入り口にいる層へのリーチを行うことができた。

実証結果からの示唆：

- 地域に根付いたNPOや教育団体と告知活動において連携することは、当該地域における認知層拡大に有効
- 経済的困窮層が求めるニーズと本プログラムが訴求する内容とのミスマッチが示唆される
- オンラインを主体としたプログラム提供によって地域間の体験機会の格差是正に貢献できる

5. 実証結果詳細②参加者数の増加

取組み内容に対する実証結果：

- 公開参加枠の設定
→公開セッション参加者は9名のみにとどまった
- 幅広い応募者を募る告知内容の工夫
→昨年度参加者27名に対して本セッションの参加者50名を得ることができた
→本セッション参加者50名のうち33名は最終セッションまで参加継続した一方、17名の離脱者が発生した

<離脱者17名内訳（クロスフィールズ所感含む）>

- 非アクティブ層（プログラム途中離脱者）：11名
- プログラム開始当初から不参加：6名

※昨年度は一部現地セッションを取り入れた実施に対し、今年度は全編オンライン実施としたが、参加者一人当たりの実施コストは対昨年度▲58万円と大幅なコスト減となった。

実証結果からの示唆：

- オンラインを主体とした告知で50名規模の参加者を得ることができる
- フルオンラインであっても一定のアクティブ層をキープした形で運営できることがわかった（離脱防止の更なる打ち手は引き続き要検討）
- 公開セッションは参加者増加に向けては、独立したイベントのような形で参加メリットなども打ち出す形での個別告知が必要

5. 実証結果詳細③多様層の受入れを叶えるコンテンツ修正

取組み内容に対する実証結果：

- 学習環境およびコミュニティ作りの工夫
 - プログラム修了生の巻き込み（企画相談/プログラムファシリテーター/参加者の相談相手/クロスフィールズ運営と参加者との橋渡し役）によって参加者目線でのコンテンツ設計や、参加者にとって斜め上の関係性からの関与による安心・安全な学習環境の構築ができた。加えて、第一期生にとっても学びの場となることがわかった
 - LINEを活用した少人数でのグループコミュニティは、プログラム途中離脱者の発生等もあり、一部のグループを除きオンラインで十分な参加者間の繋がりを作ることはできなかった。一方でその後リアルで会う約束をしたり、インスタグラムの交換が終了後になされたりするなど、LINEグループ組成の価値も垣間見えた
 - 各セッション後(計6回)およびプログラム期間中(計3回)に自由な対話会を開催したことで、セッション内では回収しきれない参加者個別の疑問解消や興味関心を更に深める場を提供できた

実証結果からの示唆：

- 各参加者の個別性や学習ニーズ、プログラム期間中に生まれる疑問や興味・関心に応えるため、セッション外の余白/対話時間の活用は有効
- オンライン主体で「参加者間の繋がり」が生まれるコミュニティ作りには、グループのメンバー同士が互いを知り、関心を持てるようなきっかけづくりが必要

最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

6. 今後の自走・普及プラン

「社会課題を解決する次世代のグローバルリーダー育成」のプログラム目的はぶらさず、昨今さらに顕在化してきている探究(/体験)格差への対応として、特に「地域間の体験格差」の是正をターゲットとして今後事業を継続的に運営する。

次年度プログラム概要（案）

1. 目的：

- ① 社会課題を解決するグローバルリーダーの育成
- ② 体験格差(地域間)の解消

2. 人数規模：30-40人程度

3. 実施時期：12月～2月末まで（3か月）

※参加者アンケートからは現状の実施タイミングで満足度が高かったため、冬実施で仮置き

4. 対象：全国高校1～3年生（海外在住含む）

5. 対象層：

- なんとなく海外のことを知ってみたい学生
- 世界の社会課題を知りたいと思っている学生
- 社会課題解決を今後実現したいと思っている学生

※プログラムに対する熱意/モチベーションはマスト要件とする

6. 今後の自走・普及プラン

自走に向けたプラン

1. 想定予算（獲得資金に応じた実施内容とする）：

- 500万円未満：全編オンライン、人員体制/メンタリン実施回数の削減
- 700-800万円：全編オンライン、今年度通りの人員体制
- 1,000万円以上：一部現地渡航/オフラインセッションあり（参加者渡航費あり）

2. 資金の確保源：

下記を活用することで資金確保を目指す

- 企業スポンサー（想定ターゲット：ソーシャルセクターへの寄付先を探している企業）
- 篤志家からの寄付（想定ターゲット：若者へのグローバル経験の提供に関心のある個人篤志家）
- 民間財団（三菱みらい財団etc）
- クラウドファンディング

* 今期すでに100万円の企業スポンサーが確定。また追加で数百万円規模の寄付の話もあり、すでに実現可能性が高まっている。「グローバルリーダーの育成」というポイントで共感する篤志家が一定いる見込み

普及に向けたプラン

1. 今期プログラムにオブザーブいただいた方々との連携模索

- 東北地方で高校生向け探究プログラムを提供する団体への知見共有・協業模索
- 大阪府教育庁との普及に向けた更なる連携の模索

2. 協業団体とのより密な連携と告知の実施

3. プログラム修了生の更なる巻き込みと彼らを通じた認知向上活動

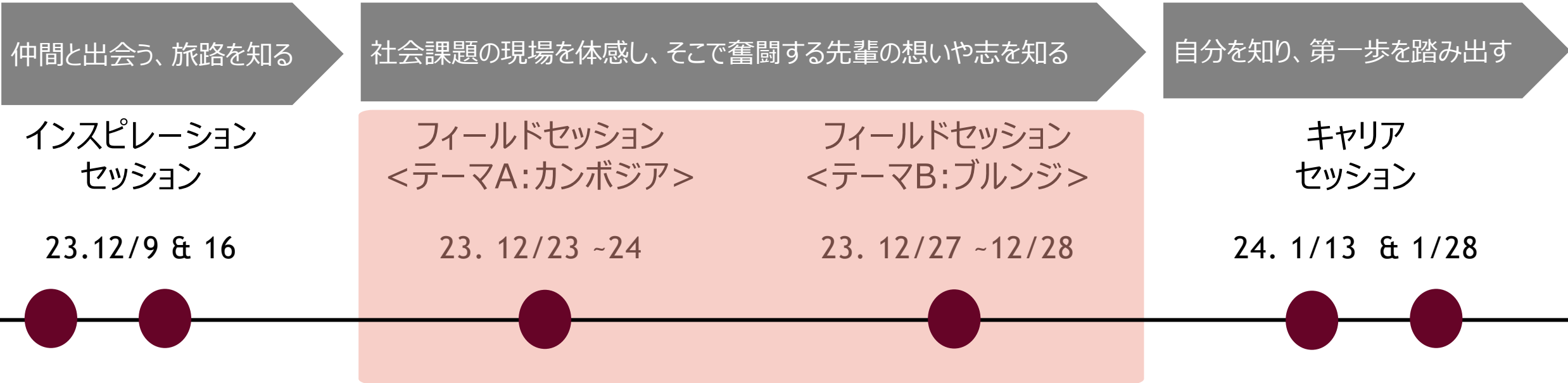
最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン

Appendix

(参考) プログラムの流れと目的

選択制



(参考) プログラム内容

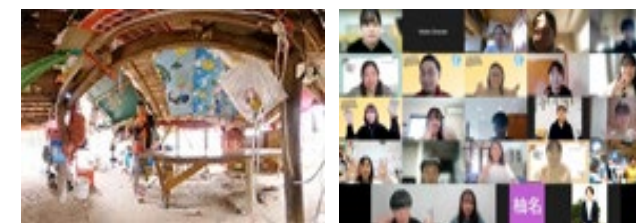
A) Inspiration Session

1. 「グローバルな社会課題」概論
 - －国際協力の歴史とグローバルな社会課題の広がり学ぶ
 - －STEAMライブラリー「共感VR」プログラムを活用したウガンダの社会課題の疑似体験と探究実践
2. 社会課題に挑むリーダーとの対話
 - －クロスフィールズの豊富なネットワークを活用したグローバルな社会課題の現場で働くロールモデルとの対話



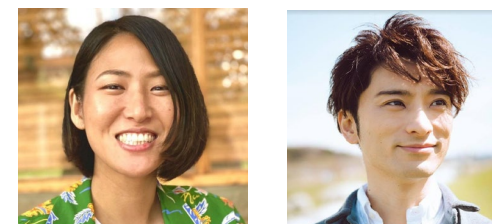
B) Field Study

1. オンラインで課題の現場（カンボジア/ブルンジ）と繋がり、現地リーダーや現地の課題の当事者との対話を通じて学びを深める
2. 自らが描きたい社会/解決したい社会課題の探究



C) Career Session

1. グローバルな社会課題に挑むリーダーとの対話
2. 進路の展望についての発表
 - －プログラム全体の学びと進路ビジョンを発表（保護者や友人も聴講可能なオープンな場）

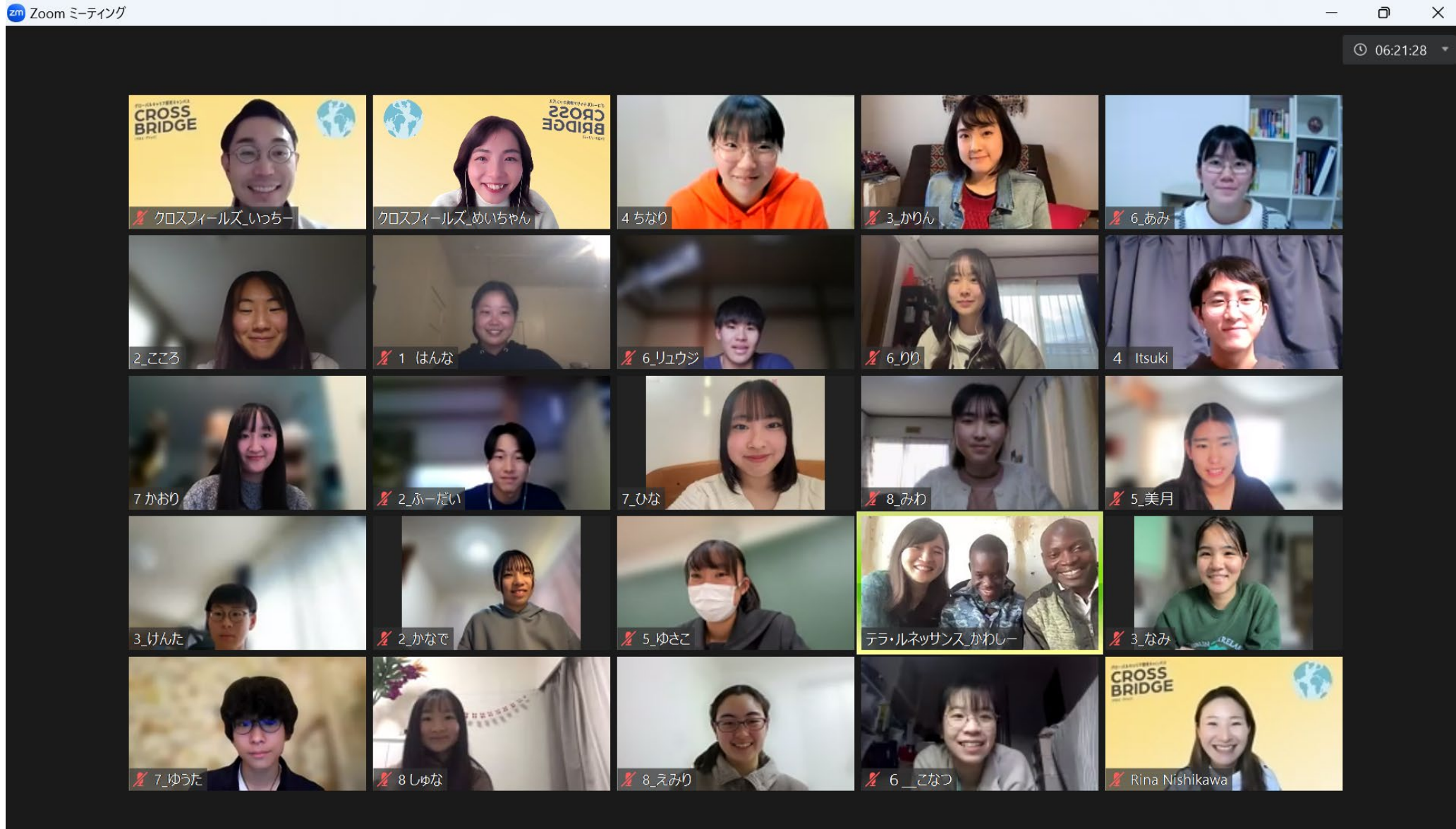


Peer-Mentoring

1. クロスフィールズメンターとのメンタリング
 - －ビジネスの現場と社会課題の現場の両方で経験豊富なクロスフィールズ職員による進路やキャリアに関するメンタリング
 - －参加者4-5名で学びを深め合う場



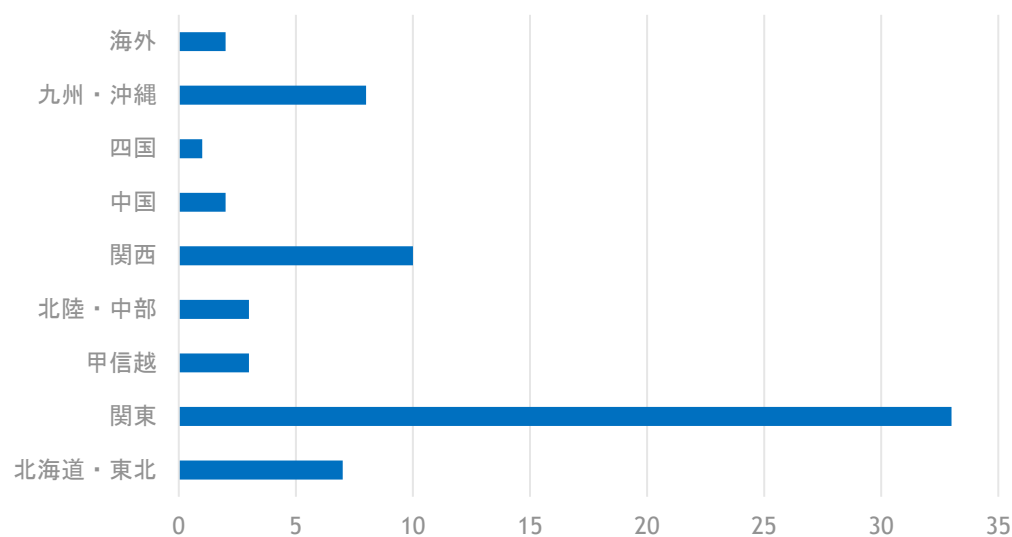
(参考) ウガンダに暮らす人と対話する参加者の様子



(参考) 応募者属性

- 今年度の応募者は70名（対昨年度+14名）にて着地。応募者の居住地は25都道府県+海外地域となり、昨年以上に多様な地域から応募者を募ることができた。
- 学校種別は私立：国公立が応募者のそれぞれ半数を占め、応募者の約7割が(授業外での)探究学習未経験であり、より幅広い層への認知拡大は一定達成できた。
- 昨年度、大阪からの応募者0名に対して今年度は6名の応募者あり、大阪における関係機関を巻き込んだ告知効果があったものとする。

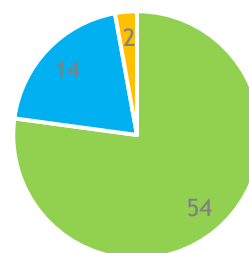
居住地（人数）



※関東内訳：東京20、神奈川6、千葉3、埼玉2、茨城1、群馬1

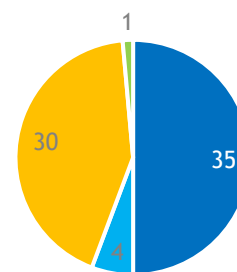
※関西内訳：大阪6、兵庫3、奈良1

男女比（人数）



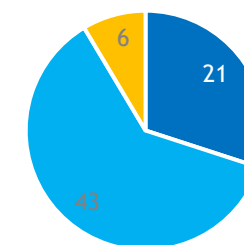
■ 女性 ■ 男性 ■ 不明

学校種別（人数）



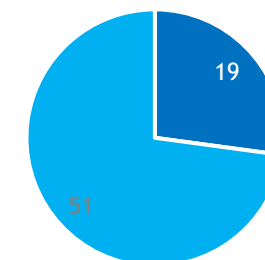
■ 私立 ■ 私立・通信 ■ 国公立 ■ 国公立・高専

学年比（人数）



■ 1年生 ■ 2年生 ■ 3年生

探究学習参加経験（人数）

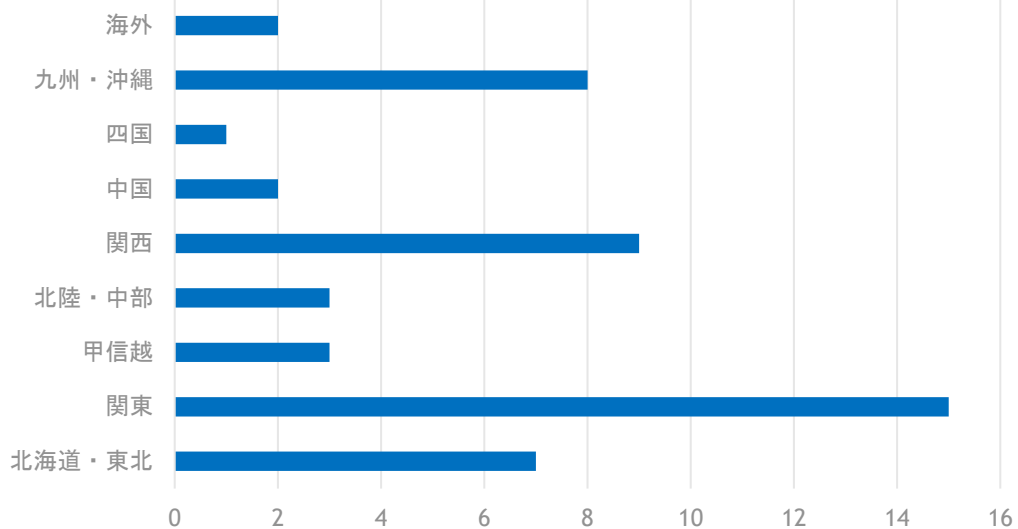


■ 有り ■ 無し

(参考) 参加者属性

- 男女比、学年比、国公立/私立、居住地をできる限り平準化(志望理由のみで選定はしない)する方針で参加者セレクションを実施

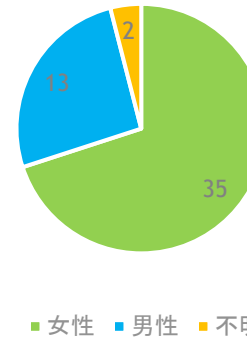
居住地 (人数)



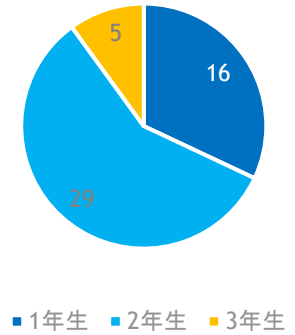
※関東内訳：東京6、神奈川3、千葉2、埼玉2、茨城1、群馬1

※関西内訳：大阪5、兵庫3、奈良1

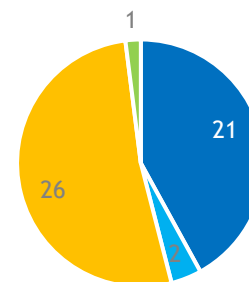
男女比 (人数)



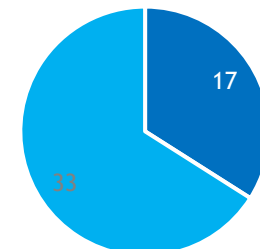
学年比 (人数)



学校種別 (人数)



探究学習参加経験 (人数)



■ 私立 ■ 私立・通信 ■ 国公立 ■ 国公立・高専

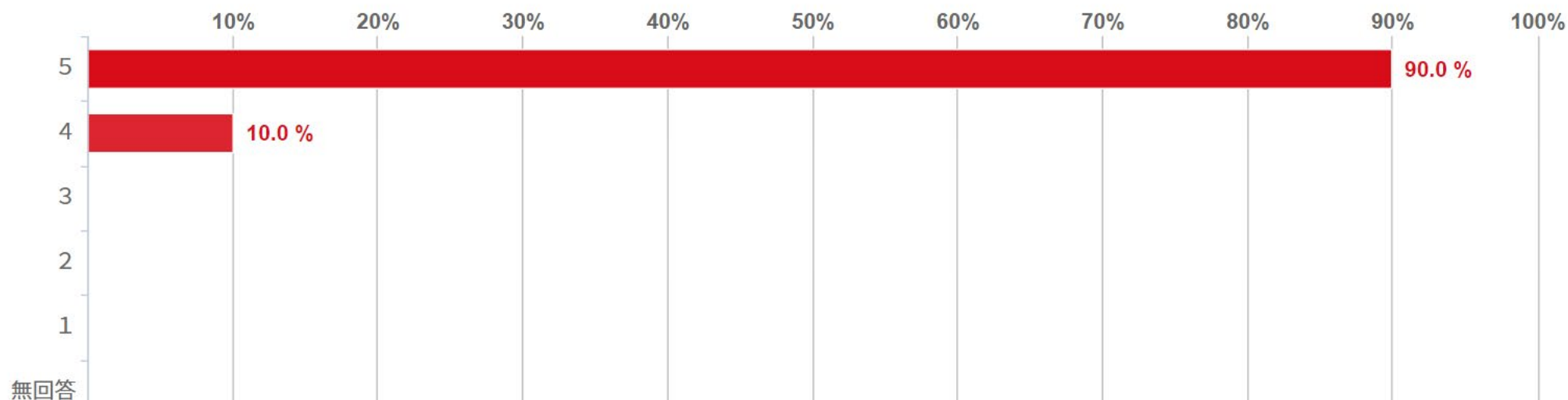
■ 有り ■ 無し

(参考)参加者アンケート結果

【クロスブリッジのプログラム全体の満足度】

(5 = 非常に満足、4 = まあまあ満足、3 = どちらでもない、2 = あまり満足しなかった、1 = 非常に不満)

(回答数: 30)



<参加者アンケート抜粋>

- ・世界の問題について当事者も交えながら話せるとても貴重な機会だった
- ・自分の物差しを使って自分の環境に社会問題を落とし込めた初めての機会だった
- ・自分の進路やキャリアを明確にできたことや、自分の意見を人に伝えられるようになったから
- ・同じような考えや思いをもつ同年代の仲間と出会えた
- ・クロスブリッジでは沢山の方の生き方を知ることができ、志(夢)を見つける手段・ヒントを教えてもらった

(参考)参加者アンケート結果

クロスブリッジに参加したことがきっかけとなり、自分の進路やキャリアについての考え方に変化はありましたか？

- クロスブリッジに参加して自分で自分の行動範囲に制限を付けていることを自覚することができ、もっと自由に生きていいんだと気づききっかけになりました。今まで考えていたことが白紙になり、また新たな未来を描くことができるようになってうれしいです。
- 今まで将来について考えるのは嫌でも心のどこかで考え続け引っかかっていたものが、自分と向き合う時間があったことでほどけたと思う。これからは自分の興味あるものにどんどんチャレンジしたい。
- メンターとの面談で、自分の中でぐるぐる考えてた将来の姿がだんだんと見えてくるようになった。
- 漠然と社会課題に絶望感を抱いていたが、自分にもできることがあると分かった。

グローバルな社会課題についての考え方に変化はありましたか？

- 能動的に知らなければ知らないままでいることの多さを実感して、社会問題に対する意欲が高まった。
- 以前は先入観を無意識に持っていて、自分の価値観で問題について語っていたので恥ずかしくなりました。今は、できるだけいろんなことになぜ？と思うようにし、先入観や自分の価値観でものごとを見ないように意識しています。
- ネットの情報だけで判断しそれを基に行動するのではなく、実際に現地のもの、人とかわり解決していくことがとても重要であると学んだ。
- 世界には多様な価値観があるため、経済発展だけが人々の幸福につながる訳ではないと知れた。また、持続可能な支援が大切だと知った。